

新潟市中学校長会報

第 182 号

発行

平成31年3月15日

広報委員会

印刷

株式会社ウイザップ
新潟市中央区南出来島2-1-25
電話 (025) 285-3311

- 巻頭言……………一頁
- 御退職の方々からのメッセージ……………一頁、三頁、四頁
- 重点協議（人権教育、同和教育委員会）……………四頁
- 大都市校長会大阪大会報告……………五頁
- 校長会 一年を振り返って（市中学校長会）……………五頁
- 年間活動の反省と課題（市中体連・市中教研）……………六頁



地域とともに

新潟市中学校長会 副会長

津野 庄一郎

（東新潟中学校長）

初めて校長を拝命したのは南区の月潟中学校であった。ここでのわずか一年が私の学校経営の原点となる。二〇一二年、磨かれた校舎に、旧月潟村民の教育にかける熱い思いを感じながら赴任した。四月初め、当時地元選出の女性国会議員も駆けつけて、地域の有志が歓迎会を開いてくれた。地域のこと、学校のこと、地域と学校の歴史、角兵衛獅子のことなどについて聞いた。生まれ育った岩船関川に似た懐かしさに感動しつつ、酔の淵に引き込まれていった。地域の教育に対する期待を胸に刻んだ一時であった。

一年目の私は「地域の行事はすべて参加する」と決め、地域とともに歩む学校づくりによいと思うことはすべてやった。夏休みの職員研修は、

コミ協の会長を講師とする「月潟のフィールドワーク」に変更した。地域文化の象徴ともいえる校歌を、生徒以上に歌えるようにと職朝で練習を重ねた。前任の校長から引き継いだ校長室ブログを地域連携の戦術とし、生徒がメッセンジャーになり学校便りを地域に届けた。キャリア教育に「ようこそ先輩」を位置付け、元村長や新社会人を招いて生き方を学んだ。活気を失いつつある地域を盛り上げようと描いた月潟祭への参画は、後任の校長により、生徒手造りの山車の引き回しや民謡流しへの参加という形で結実した。そして、一年が経ち、自分の意とは別に新潟市教育委員会に異動することになる。指導主事として学校訪問で、新潟市内の小中学校の授業づくりを支援

した。それでも頭の片隅に「校長は地域とどのように連携を図ろうとしているのだろうか」という問いが常にあった。その中で、地域とよりよい関係を築きながら素晴らしい成果に結びつけている学校がたくさんあることや、政令市新潟の学社民融合の取組が全国的にも秀逸であることを知った。

二〇二一年、新学習指導要領に基づく「社会に開かれた教育課程」が本格実施となる。よりよい社会をつくるという目標のもと、教育課程を紹介して学校と地域社会が互いにつながり合うよう求められている。生徒のいかなる資質・能力を育てるかを共有し、教育資源を掘り起こして教育課程に結びつけ、教職員チーム一丸となって魅力ある学校づくりを推

進していきたい。その時「教師が子どもの力を高めて地域の信頼を得る」ことはもちろん大切ではあるが、月潟のように「地域が教師の力を高めて教師を育てる」という面も心に留めおきたい。

働き方改革は、学校でも喫緊の課題となっている。そうした中、昨年、大都市中学校長会大阪大会で発表した藤本校長（内野中学校）の、「地域人材との協働による多忙化緩和の可能性について」の取組は、予算や教員増が見込めない現況において示唆に富む。業務のスクラップ&ビルドの「働き方改革」を進めつつ、教職員のモチベーションにつながる「働き甲斐改革」を促していきたい。憧れる対象としての教師や学校が今ほど求められている時はないからだ。今年度、猪股会長が推進した同じ地域特性をもつ区校長会を足場に切磋琢磨し、地域社会の負託に応えたい。

今年もお世話になった月潟の方から年賀状が届いた。校長としてまだまだ道半ば、自校の竣工記念誌と創立二十周年記念誌を手にとった。